

Because I am a Girl

THE STATE OF THE WORLD'S GIRLS 2013

In Double Jeopardy: Adolescent Girls and Disasters

世界ガールズ白書 2013 年版 サマリー **二重の危機——思春期の女の子と災害——**

二重の危機——思春期の女の子と災害

「災害はジェンダー不平等を強め、存続させ、増加させ、女性の置かれる状況をいっそうひどいものにする。

災害自体は誰にも等しく襲いかかるが、その影響を増幅させてしまう差別をするのは、人間なのだ」

ジェンダーに配慮した災害リスク軽減活動に向けて 指針と実践ガイドライン

「いちばんつらかったのは、発言できなかったです。私たちにも話したい重要なことがあるのだということを、私たちが若くて女性だからという理由でコミュニティが認めてくれなかったことです」

シオマラ、19 歳、エルサルバドル（注1）

災害時に人々が経験するのは、単に災害そのものだけではない。災害時に思春期の女の子の身にふりかかることは、その地域社会において、そして政治的・経済的・社会的・文化的背景の中で女性や女の子たちがどのように扱われているかを直接反映している。また、女の子が育ってきた家庭環境、地位、年齢、能力、物質的豊かさや、女の子が暮らす国や属している社会集団などのさまざまな要素にも影響される。したがって、ダッカのスラムに暮らす 17 歳の女の子が洪水や地震に遭って経験することは、エルサルバドルの村に暮らす 12 歳の女の子や、オーストラリアに住む 14 歳の女の子が経験することとは異なる。だが、共通していることはある。人道支援において、視界に入らない問題はまったく考慮されないことがあまりにも多い、ということだ。

災害や危機は、見舞われるすべての人にマイナスの影響を与える。人々は命を落としたり負傷したり、家族や生計の手段を失ったりするのだ。だが女性の場合、とりわけ思春期の女性の場合、こうした災害や危機により男性の場合よりも大きなリスクにさらされる可能性がある。ただでさえ娘よりも息子の方が優遇される社会であれば、それがいっそう顕著になる。その理由をひとことで言い表すならば——「力」だ（この力とは、権利や情報へのアクセスなど社会的な力、内在的に開発された力、などを指す）。

多くの社会において、女性や子どもが災害時により脆弱になるのは、相対的にもっている力が少ないからだ。女性と女の子、あるいは男の子と女の子の間の区分が曖昧ではあるが、一般的に言って、災害時に死亡する確率は、女性と子どものほうが男性よりも高い（注2）。2010年にパキスタンでおこなわれた調査では、洪水で住む場所を失った人の85%が女性と子どもであり（注3）、2004年のスマトラ沖津波では、男性より4万5000人も多くの女性が命を落としたことがわかっている（注4）。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）が141カ国で実施した調査では、救助活動においては一般的に男の子のほうが女の子よりも優先されがちだという事実が判明した（注5）。この調査では、ある父親の発言が引用されている。「（1991年にバングラデシュを襲ったサイクロンで）波にさらわれかけて、手をつかんでいた息子と娘の両方を助けきれないと思ったとき、娘の手を離した。息子がいなければ家系が途絶えてしまうからだ」

大規模な災害は、思春期の女の子が日常的に直面しているリスクにさらなるリスクを上乗せするものだ。どのような生い立ちであっても、暴力と差別はすべての女の子に影響を与えるが、彼女たちが貧しい家庭で育っていればその傾向はいっそう強くなる。世界中の女の子の25%以上が性的虐待や暴力を経験しているし、6,600万人の女の子がいまだに学校に通えていない。そして開発途上国では、3人に1人の女の子が18歳の誕生日を迎える前に結婚させられているのだ（注6、7、8）。

「災害のときとその直後、私たちは少しでも収入を得るために日雇いの仕事をさせられました。農場の中や外での労働で、私たちを雇っている農場主や他の男の人たちのいやらしい目つきにも耐えなければいけませんでした。あの人たちの私たちに対する扱いも、一種の性的虐待です」

バビヤ村の女の子たち、ネパール（注9）

だが、思春期の女の子たちが直面するリスクは、全体像の一面に過ぎない。ナーガーパッティナムから来たこの16歳の女の子のように、多くの女の子たちが勇気を出してイニシアティブを取っている。

「津波が来て家に水が流れこんできたとき、私は2歳の赤ちゃんを抱き、2人の小さな男の子を連れて家の屋上へ駆け上がりました（注10）」

では、災害時における思春期の女の子たちのニーズに対する人道支援関係者の取り組み方を見直すことが、なぜ重要なのか？

第一に、災害が起こる頻度が高まっているからである。1970年代では1年間に起こった災害が90件であるのに対し、過去10年では1年間に起こった災害は450件近いのだ（注11、12）。

第二に、災害は、それに対処する手立てを持たない国や人々に圧倒的な被害を与えることがわかっているからである。10件の災害のうち9件、そして災害による死者のうち95%が、途上国に集中しているのだ（注13、14）。災害がもたらす負の影響は、被害に遭った子どもや青少年の生涯にずっと影を落とし続ける可能性もある。国連人間開発報告書にはこう記載されている。「栄養不良は、雨が降ったり洪水が引いたりすれば解決する苦難ではない。それは負の連鎖となり、子どもたちは生涯その影響に苦しめられるのだ（注15）」

第三に、災害時に思春期の女の子に起こることは予測可能であり、予防可能だからである。そしてそれは、法の下での彼女たちの権利を侵害するものでもある。彼女たちを守るための指針は存在するかもしれないが、準拠されていない。2012年のジェンダーと安全に関する機関間報告書には、「ジェンダー平等は贅沢や特権ではない」と記されている。ジェンダー平等は、国際人権法、女性の人権、そして子どもの権利を含む国際法の枠組みに基づいているのだ（注16）。

第四に、現実には人道支援関係者と開発支援関係者が別々に活動することが多いからである。これは、いずれの側からも見過ごされるかもしれない思春期の女の子たちのような集団にマイナスの影響を与える。2015年には、ミレニアム開発目標が再策定される予定になっている。そこに向けて、開発とDRM（災害リスク管理）を再構築することで「旧態依然」の状態を変えようという世界的議論が起こりつつある。

今こそ、思春期の女の子に焦点を当て、人道支援プログラムと開発プログラムとの間の大きな溝を埋める時なのだ。

生存における問題——災害時の健康と福祉

「私にとっても、私の家族にとってもつらい出来事でした。大事な人たちをなくして胸が痛いし、食糧や住む所を見つけるのも大変です……母は、明日を信じて、未来を信じなければだめだと言います。私も信じてはいますけど、時々、あまりにつらくて何もかもがばらばらに壊れてしまうように思うことがあります」

シーラ、16歳、フィリピンのリサール州で、台風「オンドイ」直撃後（注17）

思春期の女の子たちは災害時や緊急事態時に女の子特有の健康問題に直面するが、人道支援の責任者にはそうした問題が無視される場合が多い。食糧や水の入手、人道支援の優先順位などは女の子の生存にかかわる重要な要素だが、性と生殖に関するものを含む健康についての情報や、女の子を対象とした適切な保健・医療サービスの提供、そうしたサービスを利用する手段、

プライバシーと安全な場所の確保、彼女たちに特有の保健・医療面でのニーズが認識され、責任者が対応していると感じられる安心感も重要なのだ。

「数字をなんでもひとまとめに報告する傾向があまりに強すぎる。トイレを何基設置したか、食糧を何トン配布したか、学校を何軒修繕したか——だがそのトイレを誰が使ったか、食糧を誰が食べたか、学校に誰が行ったかは誰も調べていないのだ」

ヴァレリー・エイモス、国連人道問題担当事務次長

国連人口基金（UNFPA）は、災害時や緊急事態時に特に高いリスクにさらされる思春期の子どもたちを3つの小グループに分けている。そのうち2つが、女の子のグループだ。

- ・幼い子ども（10歳～14歳）、特に女の子は、その依存度の高さ、力の欠如、意思決定への参加度の低さから、性的搾取や虐待にあうリスクが高い。

- ・妊娠した思春期の女の子、特に16歳未満の女の子は、閉塞性分娩のリスクが高い。これは命にかかわる危機的状況で、出産時に骨盤が未発達で小さすぎるために産道を赤ちゃんが通過できない場合に起こり得る。緊急産科治療は災害時には対応できない場合が多く、思春期の母親やその子どもの疾病率と死亡率が高まるリスクがある。

- ・社会から取り残された思春期の子ども、たとえば HIV 陽性の子ども、障がいがある子ども、異性愛者ではない子ども、先住民や移民の子どもなどは、差別、偏見、文化、言語、物理的あるいは精神的制約のためにさまざまなサービスにアクセスできない場合がある。また、こうした子どもたちは力がなく、社会に参加することもできないため、貧困や性的搾取・虐待のリスクが高まる。

災害時、家族の離散や保健・医療サービスの混乱により、思春期の子どもたちは性と生殖に関する健康について必要な情報やサービスを入手できなくなる可能性がある。女の子と若い女性にとって、彼女たちの置かれた状況、年齢、性別ゆえに、望まぬ妊娠や安全でない妊娠中絶、性感染症や HIV のリスクが高まるのはまさに災害時なのだ。

「空腹だとつらいものです」——思春期の女の子と性的搾取・虐待

「世界は、避難民キャンプでのジェンダーに基づく暴力や性的搾取をまったく認識できていない。今でもそれは起こっており、そうした虐待を報告するシステムがあったとしても、受益者が自分たちの権利に気づいてもいなかったり、フォローアップのためのまともなプロセスすら構築されていなかったりする場合が多いのだ」

ジェニ・クルーグマン、世界銀行ジェンダー開発局長

災害がただでさえ貧しい思春期の女の子とその家族をさらなる貧困へと追いやると、残された最後の手段が、たったひとつの財産——自分の体——を売ることになってしまうのはめずらし

いことではない。ハイチの大地震後、ヒューマン・ライツ・ウォッチが避難民キャンプで実施した調査では、自分や子どもが食べていくための手段が他にないため、性を売る女性や女の子が数多く見られた。

「なんとかして食べて行かないと」と語るのはハイチのクロワ・ド・ブーケにある避難民キャンプに暮らすジェスレーヌだ。「みんな、自分にできることをして生き延びようとしているのです。女性は、子どもに食べ物を与えるために男性と関係を持ちます。よくある話です。私の娘は12歳ですが、キャンプの中に友だちがいません。あんな小さな女の子でも、物と引き換えにセックスを要求されるからです。私には仕事がありません。助けてくれる両親もいません。だから、1ドル程度のお金のためにセックスをします。運悪く妊娠してしまう女性もいますけど、避妊具が手に入るなら、自分たちの身を守りたいと思っています……売春はいけないことですけど、他に何ができるって言うんですか（注18）？」

2009年にフィリピンを襲った台風「オンドイ」の長期的影響を調査した一次調査報告書でも、思春期の女の子たちが同じような問題に苦しんでいる現実が明らかになった。13歳のアンナはこう語る。

「つらいです。みんな食べるものがなくて、とにかく食べ物を手に入れたくて悪いことにも手を出します。こういうときどうすればいいのか、誰に相談すればいいのかもわかりません（注19）」

多くの社会で、性的虐待や性的暴力について語ることはタブーとされている。レイプは女の子に不名誉をもたらす。豊かな国であっても、司法制度はレイプ犯ではなく被害者に非があると責める場合があるのだ。

インドのタミル・ナードゥを津波が襲った後も、多くの若い女性が社会からのけものにされるのを恐れて自分の身に起こったことを話せずにいる。

「私は17歳です。避難民キャンプで夜寝ていたら、レイプされました。何が起こったか、わからなかった。相手の顔も見えていません。たくさん血が出ました。誰にも言いませんでした。最近、体の調子がおかしくて、お母さんに病院へ連れて行かれて妊娠していることがわかりました（注20）」

ハイチでは、多くの女性や女の子が地震の後に受けたレイプについて何の助けも求めていなかったことがヒューマン・ライツ・ウォッチの調査で判明した。何があったかを周りに知られるのを恥じているのだ。15歳のメアリーは、自分がレイプされたことを同世代のいとこに打ち明けるまで8日間もためらっていた。それも、そのいとこが同じ体験をしていると知っていたからようやく打ち明けられたのだ。

「自分がレイプされたことをいとこに話すまでは本当に恥ずかしかったけど、いとこもレイプされたことがあるんだから、自分のことも話していいんだって思ったんです（注21）」

災害は、早すぎる結婚の増加にもつながる。ソマリランド、バングラデシュ、ニジェールで実施された調査では、子どもの結婚を防御手段として考える家族が多く、災害時における地域的対応として行われることが判明した（注 22）。

「ここでは、たくさんの女の子が苦しんでいます。13 歳になると学校をやめさせられ、結婚させられるのです。家族が貧しいから、食べ物と引き換えに女の子を売ります。花嫁持参金も払えません。その結果、女の子たちは妊娠させられ、13 歳で臍瘻（ちつろう）（注 23）になって死んでしまうこともあります」

ザビウムとイディー、15 歳、ニジェール（注 24）

多くの国が署名した国際協定で子どもの結婚が人権侵害だと宣言されているにもかかわらず、早すぎる結婚の習慣はいまだに世界中で続けられている（注 25、26）。ある報告では、16 カ国中 11 カ国で、女性の半数以上が 18 歳を迎える前に結婚していることがわかった（注 27）。中には、さらに低い年齢で結婚させられる女の子もいる。2012 年の報告では、毎年 150 万人の女の子が 15 歳未満で結婚しているとのことだ。

隣人にヤギを贈る——サヘル地域の食糧危機における思春期の女の子の結婚（注 29）

サヘル地域は、数々の大規模な食糧危機を経験してきた。本報告書のためにニジェールで実施された調査では、災害時における子どもの結婚に関連して二つの相反する傾向が見られた。フォーカスグループのディスカッションの際に話を聞いた 12 歳から 19 歳の女の子 135 人のうち、64%が既に結婚しており、39%が出産していた。結婚時の平均年齢は 14 歳だった。

だが、状況は複雑だ。食糧危機が子どもの結婚に及ぼす影響は、コミュニティによってまったく逆になる。ティラベリとドツソの一部では、災害によって子どもの結婚が減少したように見受けられた。一方マラディでは、増加したようだった。これは民族性によるものかもしれない。マラディに住むハウサ族やプル族は娘を幼いうちに結婚させる傾向があるが、ティラベリやドツソの一部に住むザルマにはあまりそのような習慣がないのだ。

ティラベリ地域では、8 人の女の子からなるフォーカスグループが、食糧危機のために子どもの結婚が遅くなったと語った。ある女の子はこのように語っている。

「食糧危機のときは、食べるものがありません。両親も食べるものがありませんし、近所の人たちもみんな食べるものがないのです。コミュニティで同じ状況にある誰かに娘を嫁にやると、損をする可能性があります。娘をもらう男の人も、同じくらい貧しいわけだから。結婚しても、娘は食べ物を求めて実家に戻ってくる可能性が高いのです。エサがないから隣の人にヤギを売ったのに、ヤギが毎日エサを食べに戻ってくるみたいなのです」

今回の調査では、食糧危機で若い男性が妻をめとるだけの資金を得られないために結婚年齢が遅くなったことも判明した。

一方、マラディとドッソの一部では、女の子が早くに結婚するケースが、食糧危機のために増加したようだった。フォーカスグループのディスカッションに参加した一人の女の子はこう語った。

「大家族に姉妹がたくさんいて、食べる物が何もなくて子どもたちに何も食べさせてあげられないときにお金持ちの男の人が来て娘の一人を気に入ったと言われたら、どうすればいいと思いますか？ 男の人に『断る』と言って子どもたちが飢えて死ぬのをただ見ているのか、男の人が娘を連れて行くのを認める代わりに娘の面倒を見てもらって、さらにたくさんのお金をもらうのか、どっちを選ぶと思いますか？」

マラディに暮らす親たちは、娘を早く結婚させざるを得なくなる理由のひとつとして、経済的理由もあると述べている。海外へ出稼ぎに行き実家に仕送りができる息子と違い、娘は家事手伝いができるとしても飢餓のときには食費扶持が一人多いということになるからだ。テッサワ県のカイワに住む親の一人が、このように語った。「娘がまだ若くて美しい時に嫁にやらず、そして飢餓に襲われれば、食べ物を手に入れるためには娘は何でもする気になります。家で食事を与えてやれなければ、家族の恥となるような真似をするかもしれません。家長として、私には子孫を残し、家族の名誉を守る責任があります。つまり、娘の面倒を見られるだけの財産を持っている男性が現れれば、娘を嫁にやってちゃんと良きイスラム教徒として暮らせるようにしたほうが良いということになります」

「娘を学校に行かせよう」——教育の重要性

「私からコンゴの女性、サヘル地域の女性、世界中の女性に対するメッセージです。『娘を学校に行かせましょう。彼女たちの未来のためにあなたがたができる最善のことなのですから』」クリスタリナ・ゲオルギエヴァ欧州委員会委員、国際協力・人道援助・危機対応担当
(注 30)

「教育を受けていない世代の未来は絶望的です。私たちは世界に声を聞いてもらい、参加する必要があります。私たちには未来が必要です。私たちは教育を受ける権利があり、学校に行きたいのです」

ベティ、17歳、避難民になった若い女性、北部ウガンダ (注 31)

女の子の教育を促進するために多くの努力がなされてきた。教育は彼女たちが積極的な市民となれるような力を与え、人生の選択肢を増やす可能性を生み出す。大人になればしっかりと収入を得て、家族が貧困から抜け出す手助けができるようになる可能性が高くなる。また、彼女たちの子どもも幼少期を生き延び、より良い教育を受けられるようになる可能性も高くなる。だからこそ、女の子が教育を受けられるようにするためなら命をかけてもいい、とパキスタンに住む15歳のマララ・ユスフザイは思ったのだ (注 32)。

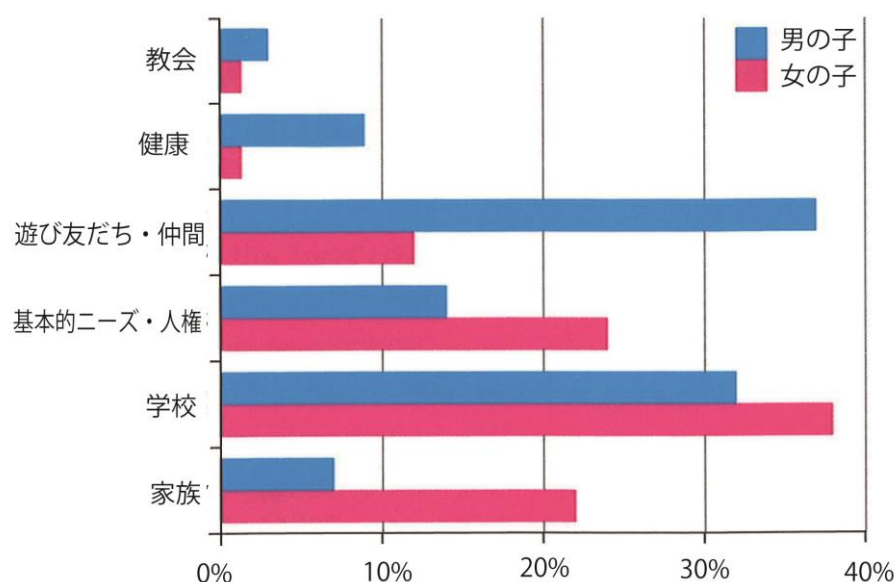
幸いにも、多くの国で、学校に通う女の子の数は増加傾向にある。だが、緊急事態時には教育が中断されることが多く、場合によっては再開がまったく見込めないこともある。だが、このような時こそ、教育の重要性が一層高まるのだ。「教育は子どもの生活に安定性、正常性、日常性をもたらします。避難民になった子どもたちにとって、それは何よりも大事なことです」と語るのは、子どもと武力紛争に関する事務総長特別代表ラディカ・クマラスワミだ（注33）。

緊急事態下における教育のための諸機関ネットワーク（INEE）は、災害時に教育が思春期の女の子にとって有益である理由を3つ挙げている（注34）。

1. 彼女たちを物理的に守ることができる。安全な学習環境にいれば、女の子は性的・経済的に搾取されたり、早すぎる結婚などのリスクにさらされたりする可能性が低くなる。
2. 心理社会的に安全な空間を女の子に提供し、身の周りでどんなことが起こっているかを認識できるようにする。習慣という感覚を与え、子どもの権利と責任の促進に長期的な効果を生む。
3. 命を救うためのメッセージを伝える場となる。学校は手洗い、病気の予防、HIV 感染の予防、緊急事態下で保健・医療サービスや食糧を入手する方法といった情報を伝える拠点となり得るのだ。

戦争、HIV、その他高リスク状況の影響について調べた西アフリカおよび中央アフリカでの調査では、「あなたを幸せにしてくれるものは何ですか？」という問いに対して、子どもたちの回答が一番多かったのが「学校へ行くこと」だった（注35）。これは女の子でも男の子でも同じだったが、女の子のほうが男の子よりも強くそう思っていることがわかった。報告書の作成者たちはこう語る。「学校に登録し、費用を支払い、教科書を受け取って試験でいい成績を取るといったささやかな出来事でも、子どもにとってはそれが幸せの元となるようだ」

あなたを幸せにしてくれるものは何ですか？



ヘイマノットの物語（注 36）

ヘイマノットはエチオピアの農村に住んでいる。彼女の物語は、度重なる干ばつの影響により女の子が学校をやめざるを得なくなる状況の実例である。

2008 年、ヘイマノットは 12 歳で、叔母と暮らしていた。近くの町にある学校に通っていたのだが、母親が病気になり、母と幼い弟と妹の面倒を見るために実家に戻ることになった。母親が働けなくなったので家族の収入は激減し、食べるものもろくに手に入らなくなった。当初、ヘイマノットは午後学校へ行き、朝に働いていた。だがやがて、妹まで病気になってしまった。ちょうどその頃、干ばつが村を襲い、作物が不作となった。ヘイマノットの母親はこう語る。

「コミュニティ全体が干ばつに襲われました。主は私たちに雨を降らせてくださらず、草が生えず、畑では作物も取れませんでした。食べ物が不足するようになったのです」

その結果、ヘイマノットは学校をやめ、碎石工場へ働きに出なければいけなくなった。それは自分の意思で決断したことだ、と彼女は言う。「学校へ行っていないし、お母さんも病気だからとても落ち込んでいました」。母親も、ヘイマノットが学校をやめたのが娘にとっていいことではないとわかっている。「学校へ行くのをやめさせたことで、娘の将来のチャンスを邪魔してしまっていることはわかっています」

その後、ヘイマノット自身もマラリアにかかり、下痢と嘔吐、高熱に襲われた。家での家事と工場での仕事のせいで、症状が悪化したのだ。人生は厳しく、やがて、ヘイマノットと母親は、ヘイマノットがまだ 15 歳だったにもかかわらず、これだけ厳しい状況では彼女が結婚する以外に家族を守る方法がないと決断した。家族が選んだ夫は、政府の役人だ。そのおかげで、ヘイマノットは工場での仕事を辞めることができた。

ヘイマノットの人生は厳しいものだ。だが、この物語は、彼女の器量の大きさを見せつけるものでもある。ヘイマノットのたゆまぬ努力としっかりした働きぶりが、コミュニティで評判となっていたのだ。母親はこう言う。「いつでも働いている娘を見た人たちが、こんなことを言っていました。『あの年で、どうしてあんなに働いて、あれだけの辛さに耐えられるんだろう？』と」

現在、ヘイマノットは人生が少し良くなったと語っている。子どもを産むのはもう少し後にして、来年には学校に戻りたいとのことだ——もちろん、夫が許してくれるなら、だが。

解決策のひとつ——思春期の女の子の参加

災害に直面した思春期の女の子が勇気と知恵、イニシアティブを発揮して家族を支え、命を救った例は枚挙にいとまがない。こうした物語が目立つのはそれがめったに起こらないからではなく、人道支援関係者やマスコミによって語られることがめったにないからだ。この沈黙は、蔓延するジェンダーに基づく差別に直接関連してくる問題である。たとえば、周りに女性がいれば思春期の女の子も声を上げる勇気を出しやすいのだが、災害時の救援活動において、権限のある地位に女性がいることは少ない。

災害時、あらゆる年齢の女の子や男の子の声に大人が耳を傾けなかったら、間違いが起こる可能性がある。このような例もある。「インドのグジャラートで 2001 年に発生し、11,000 人以上の命を奪った地震後の救援・復興支援活動において、子どものための施設の多くが危険だと判断された。子どもを中心とした視点からきちんと検討されていなかったからだ。プロジェクトではたとえば、好奇心旺盛な子どもがすぐに外して壊してしまう可能性があるガラス窓を取り付けたり、遊ぶには危険な遊び場を作ったり、子どもの手が届かない高さにある水洗タンク付きのトイレを設置したり、しかもそのための水が家庭には不足していたりした（注 37）」。

同様に、避難民キャンプの事務局が配布した水容器は 20 リットルから中には 50 リットルもの容量があるもので、満杯になると女の子にはとても抱えられない重さだった。水汲みは通常、家庭では女の子の仕事になることが多いのに、女の子たちに直接確認しようと思う者が誰一人いなかったのだ（注 38）。

プランが実施したオンライン調査では、様々な分野の回答者が「思春期の女の子との有意義な話し合い」が欠けていると回答した。それがなされていると回答したのは、水と衛生に関する分野の回答者でもっとも高く（47%）、低かったのは保護の分野だった（26.8%）（注 39）。にもかかわらず、回答者の 83%が、人道支援の計画策定においてはこれが優先されるべき重要課題だと回答しているのだ。

女の子が本当の意味で参加すると物事が変わり始める、と災害リスク管理アドバイザーのフランシスコ・ソトは言う。「この（災害リスク軽減の）研修は、若者たちが 12 歳の頃に始まったワークショップでした。それが地域開発の前向きな長期的変化を生む道筋を作ったのです。今では若者たち、特に若い女の子たちが、コミュニティの有能なリーダーとして認識されています。若い女性も、若い男性とまったく同じように地域活動に参加しているのです。むしろ、若い女性のほうが参加の度合いが高い場合もあります。真っ先に手を挙げ、発言するのは彼女たちなのです。彼女たちには勇気があります。これは、若い女性たちが前進し、男性と同じ権利を持っているのだと理解しているということです（注 40）」

「私自身の人生にとって、この研修はいろいろな意味で助けになりました。自尊心を身につけさせてくれたし、若い母親だからという理由で周りの人より自分が劣っていると思わないようになりました。それに、私は自分のもつ権利もわかっているし、その権利をどうやって守り、侵害されないようにすればいいかもわかっています」

マリア・エレナ、18 歳、エルサルバドル（注 41）

地震や洪水、干ばつをただ生き延びることだけが人道支援活動の目的ではない。人道支援・開発支援関係者が優先事項とすべきことは、生き延びた者たち、特にもっとも脆弱な者たちが喪失や心の傷と向き合うために必要な支援を受け、生活の再建と将来起こり得る災害に備えるために必要な資源を手に入れられるようにすることだ。

思春期の女の子に関して言えば、こうした支援は行われていない。初期調査の結果からは、人道支援・開発支援関係者が思春期の女の子のニーズに応えられていない現状が浮かび上がって

くる。今後起こり得る洪水や干ばつ、地震を生き延びるために必要な知識、技術、資源を確実に彼女たちが手に入れられるような状況が整備できていないのだ。災害の後、さらに大きなリスクにさらされている彼女たちのニーズに応えることもできていない。健康で教育を受けた女の子ならコミュニティが災害に対応し、復興していくためのリーダーになることができる。だが早い時期に学校をやめざるを得なかった女の子、病気になった女の子、必要な時に避妊具が入手できなかった女の子、若くして妊娠をした女の子、生き延びるために体を売らなければならなかった女の子たちは、災害時だけでなくその後の生涯にわたって影響を及ぼしかねない悲惨な結末に、潜在的に直面しているのだ。

「‘Real Choices, Real Lives’ ～本当の選択、本当の人生～」進捗報告

7年目に入った「‘Real Choices, Real Lives’ ～本当の選択、本当の人生～」は、世界の9カ国（ベナン、トーゴ、ウガンダ、カンボジア、ベトナム、フィリピン、エルサルバドル、ブラジル、ドミニカ共和国）に暮らす142人の女の子の人生を追跡調査している。調査では親戚やコミュニティの人々への聞き取りやフォーカスグループによる話し合いを実施し、女の子の暮らしの現状を詳細に調べている。2006年に生まれた女の子たちは、全員が今年7歳になる。

女の子にとってのリスク因子

女の子と若い女性が特に危険にさらされるのは、世界的に災害として認識されている洪水や地震、戦争などの大規模な事象の場合だけではない。

多くの家庭にとって、生活費の増加や自然災害の危険性の増加は常に悩みの種だ。慢性的な貧困の中で暮らし、食糧不足に怯え、インフラも乏しい生活は、毎日が迫り来る個人的災害との闘いなのだ。こうした日々のストレスは見過ごされがちだが、女の子や若い女性が社会的・経済的資本を構築し、健康に生存して教育を受ける上で大きな影響を及ぼす。

中には、最終的なリスクを軽減するための戦略的決断を下す家族もいる。そうした家族は強い社会的ネットワークを構築し、生計をたてる手段を増やし、学齢期の女の子の家事負担を軽減している。多くの親がリスク軽減には教育が重要だと気づいてはいるものの、娘を学校に行かせることは必ずしも単に希望や選択で実現できることではない。リスクから守るということは、女の子の活動を制限し、教育へのアクセスも制限することにつながる場合があるのだ。

プランが調査してきた女の子たちは、幼いころから母親や祖母の仕事を真似して手伝うよう積極的に仕向けられて育っている。今では、ほとんどの女の子が日常的に手伝いをしている。ブラジルのシンティアはこう話す。「学校から帰ってきたら、おうちの手伝いをするの。床にほうきをかけて、ソファをきれいにして、ベッドを整えて、ベランダと裏庭にもほうきをかけるのよ」。カンボジアのシファの母親ハン・ラによると、「娘は朝6時に起きて歯磨きをし、一人で水浴びをします。赤ちゃんの世話を手伝ってくれて、それから朝食を取り、学校まで歩いて行きます。徒歩10分くらいのところにあるのです。午後になると、昼寝している弟のことを

3時間ほど見ていてくれます」。この調査では、このようなジェンダーによる役割や責任のために女の子が直面する日々のリスクの範囲も明らかになった。調査の対象となっている女の子のうち、残念ながら6人が亡くなっている。そのうち少なくとも2人が、家事に関する事故で亡くなっているのだ。一人は家で調理の火によって亡くなり、もう一人は近くの川での不適切な衛生設備のために溺れて亡くなった。

女の子を「守る」ことでリスクを軽減する

女の子たちが成長して定期的に学校へ通っている現在、家を出て外の世界に触れるようになったことで女の子たちが直面することになる新たなリスクに、周囲がどのように注意を向けているかをプランでは観察している。女の子が思春期に近づくにつれて通学途中に性的暴行を受けるリスクが増えるのではないかと両親の心配が高まるのが、他の調査ではわかっている。

現在のところ、ほとんどの親が心配しているのは娘が交通量の多い道や幹線道路を渡ることだ。ベナンに住むコンソラータの母親はこう語る。「危ないのは、学校が交差点の近くにあることです。交差点だから車の往来が激しいんです」。雨季になると、エルサルバドルのヤクリーンは冠水のためにまったく学校へ行くことができなかった。母親によると、「波が高い時には、海水が道路に流れ込みます。車も通れないし、子どもたちも道を歩くことができません」

暴力のリスクも、地域によっては差し迫った現実だ。ブラジルのエロイーザは、「おかあさんは、あたしと姉妹が（外で）男の子と遊んだらだめだって言うの」と言う。ブラジルで調査を実施しているプランの調査員は、この地域が実際に危険であると報告している。窃盗や強盗、ギャング闘争、殺人までもが日常的に報告されているのだ。調査員はこのように述べている。

「エロイーザの家族は、家の安全についても深く心配している。裏庭の塀を高くして、電気柵を取り付けると話していた」。同じくブラジルのケヴィレンは、こう語った。「外に出ると、悪い人たちがいるのがいや。大きくなったら弁護士になって裁判所で働いて、悪い人たちを牢屋に入れるの」

エルサルバドルでは、調査に参加している家族の多くが自分たちの身の安全を常に心配している。女の子たちの母親の中には、自身が性的暴力を経験した者もいるのだ。今年、フィリピン、ベトナム、エルサルバドルで調査したやや年長の女の子たちも語っていたことだが、性的暴力への恐怖は、不安定な時期や災害時にはますます高まる。こうした状況では、女の子とその家族が持つ夢や期待（高等学校や大学に進学する）と現実（結婚まで家で過ごす）とのギャップが広がりやすい。

昨年、プランは女の子たちの母親への聞き取りから知り得た彼女たち自身の経験と人生について報告した。彼女たちの多くがある程度の正規教育を受けており、その結果、自分の娘も学校へ通い、自分よりもジェンダー平等の機会に恵まれ、より充実した人生を送ることができるようになるべきだと考えている。この世代の母親たちが娘がもつ教育への権利を支援しようと決

意していることはわかっている。家族が直面する貧困とリスクにもかかわらず、女の子たちに明るい未来を見出すことができるのは、母親たちのこうした決意のおかげなのだ。

主な行動計画

1. 災害への備えと対応のあらゆる段階で、思春期の女の子たちの意見を聞く。
2. 女性が緊急対応チームで働けるよう、研修と動員を実施する。
3. 教育、保護、そして性と生殖に関する健康といった中核分野において、思春期の女の子を対象としたサービスを提供する。
4. ジェンダーに基づく暴力からの保護のための資金拠出を、緊急対応の第一段階に含める。
5. 思春期の女の子のニーズを示すために性別と年齢に分けたデータを集計し、計画立案担当部門に情報を提供する。

「女性と女の子のニーズや懸念を明確に人道支援活動に含めなければ、救援活動の有効性が損なわれてしまいます」

ミシェル・パチェレ、UN ウィメン事務局長（注 42）

「何かあったら誰か頼れる人がいてほしいです。私たちが支援を必要としていること、避難所や食糧、仕事、学校、プライバシーを保って体を洗える場所が必要だと政府に訴えたいのです。私たちの声を届ける方法がほしいのです」

シーラ、16 歳、フィリピン

「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」は、国際 NGO プランが世界の女の子の現状を評価し、年に一回発行する報告書である。女性と子どもが政策やその他の施行において配慮されている一方、女の子のニーズや権利は無視されることが多い。これらの白書は、なぜ女の子たちに対して男の子や成人女性とは異なった対応をすべきかという裏づけを、彼女たち自身の声とともに提供するものである。本白書には、9カ国 142 人の女の子たちを 2006 年から追っている研究など、一時調査からの情報が含まれている。過去の白書で取り上げた内容は教育、紛争、経済、都市化や IT、そしてジェンダー平等における男の子や若い男性の役割などがある。プランは国際的支援団体であり、75 年以上にわたって活動してきた。現在、世界 50 カ国で子どもとそのコミュニティとともに活動を行っている。

行動を起こすならこちらのリンクから www.plan-japan.org/girl/

- 1 プロジェクトコーディネータのジーン・ケイシーへのインタビュー。「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」プラン・インターナショナル・エルサルバドル、2012年。
- 2 クリステイナ・ピーターソン「現場から 災害対応と復興時におけるジェンダー問題」『ナチュラル・ハザード・オブザーバー』誌、女性と災害についての特集号、21号第5巻、1997年。
<http://www.colorado.edu/hazards/o/archives/1997/may97/may97a.html#From>
- 3 アクションエイド・パキスタン「2010年の洪水後の生活再建」アクションエイド・パキスタン、2011年。
- 4 ジョン・テルフォード、ジョン・コスグローヴ、レイチェル・ホートン、「インド洋津波への世界の反応に関する合同評価 総合報告」ロンドン、津波評価連合（TEC）、2006年。本報告書からの注記：この推定値は図2.3に示された死亡率比較差の38を、各地域の死者・行方不明者の合計に当てはめたものである。死亡率が不明だった地域に関しては最寄りの地域の死亡率が適用され、地域ごとの死亡率が入手できなかった地域に関しては人口分布を基に推定値を計算した。一部地域では15歳未満でもわずかに女性死亡率が高かったため、厳密にはすべてが成人女性だったとは言えない。
- 5 エリック・ノイマイヤー、トーマス・ブランパー「自然災害が持つ性差別的性質 大災害が平均余命のジェンダー格差に与える影響、1981年～2002年」ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、2007年。
[http://www2.lse.ac.uk/geographyAndEnvironment/whosWho/profiles/neumayer/pdf/Article%20in%20Annals%20\(natural%20disasters\).pdf](http://www2.lse.ac.uk/geographyAndEnvironment/whosWho/profiles/neumayer/pdf/Article%20in%20Annals%20(natural%20disasters).pdf)（最終アクセス日2013年5月10日）
- 6 WHO「女性の健康 概況報告書第334号」WHO、2009年。
<http://www.who.int/mediacentre/factsheets/fs334/en/index.html>（最終アクセス日2013年5月13日）
- 7 UNESCO「万人のための教育 グローバル・モニタリング・レポート 若者とスキル——教育を仕事につなぐ」パリ、UNESCO、2012年
- 8 UNICEF「世界子供白書2011 青少年期（10代）可能性に満ちた世代」ニューヨーク、UNICEF、2011年。
- 9 ブラン・ネパール「気候変動がネパールの子どもたちに及ぼす影響」ブラン・ネパールおよびネパール自然災害リスク軽減センター、2012年。
- 10 ブラン・インターナショナル アジア地域統括事務所「子どもと津波 災害対応、復興およびリスク軽減時における子どもとの取り組み——津波対応時の子どもたちの参加から学んだ教訓」タイ、ブラン・インターナショナル アジア地域統括事務所、2005年。
- 11 レベルは異なるが、原因としては気候変動、急激な都市化、貧困、環境破壊が挙げられる。
- 12 ダイアン・マズラナ、プリスカ・ベネッリ、フマ・グブタ、ピーター・ウォーカー「性別と年齢は重要である 非常事態下の人道支援対応を改善する」ファインスタイン国際センター、タフト大学、2011年8月。
- 13 アニタ・スワラップ、イレヌ・ダンケルマン、カンワル・アフルワリア、ケリー・ホリーリシン「嵐を乗り越える 思春期の女の子と気候変動」プラン・インターナショナル、2011年。
- 14 ブリジット・レオニ、ティム・ラドフォード「違うレンズを通して見る災害 どのような結果にも原因がある——災害リスク軽減を取材するジャーナリストのための手引き」UNISDR、2011年。
- 15 UNDP「人間開発報告書2007/8 気候変動との戦い ——分断された世界で試される人類の団結」ニューヨーク、UNDP、2007年。
- 16 クリスティン・ペルソー「リスク管理においてジェンダーを主流化するためのジェンダーと安全の指針、EISF 報告資料」欧州機関間安全保障フォーラム（EISF）、2012年。

- 17 ジャクリン・ヘイヴァー「プラン・インターナショナル『Because I am a Girl 世界ガールズ白書』2013年版のための調査 フィリピン、リサール州の災害時に女の子たちが経験したこと」2013年1月。
- 18 ヒューマン・ライツ・ウォッチ「『誰も私たちのことを覚えていない』 地震後のハイチで女性や女の子の健康と安全の権利を守れていないという失敗」アメリカ、ヒューマン・ライツ・ウォッチ、2011年。
- 19 ジャクリン・ヘイヴァーによるプランのための報告書、2013年。
- 20 ピープルズ・レポート「津波後の女性に対する暴力 インド、モルディブ、ブントランド（ソマリア）、スリランカ、タイ」チェンナイ、ピープルズ・レポートおよびアクションエイド・インド、2007年。
- 21 ヒューマン・ライツ・ウォッチ、2011年。
- 22 ワールド・ビジョン「もつれた糸をほぐす 脆弱な国家の早すぎる結婚を検証する」イギリス、ワールド・ビジョン、2013年3月。
- 23 膣瘻（ちつろう）とは、産道と膀胱または直腸との間が裂傷を起こす症状である。難産が長引くことで起こる場合が多く、多くの場合、自制不可能な失禁を伴う。まだ子どもを産めるまでに体が発達していない若い女性が妊娠した場合に多く見られる。
- 24 プロジェクトコーディネータのジーン・ケイシーへのインタビュー。「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」プラン・インターナショナル・ニジェール、2012年。
- 25 国連「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」国連、
<http://www.un.org/womenwatch/daw/cedaw/text/econvention.htm>（最終アクセス日 2013年5月15日）
- 26 オフィス・オブ・ゴードン・アンド・サラ・ブラウン「婚姻を逃れて学校へ 教育によって子どもの結婚に対抗する。ゴードン・ブラウンによる報告」オフィス・オブ・ゴードン・アンド・サラ・ブラウン、2012年。
- 27 オフィス・オブ・ゴードン・アンド・サラ・ブラウン、2012年の引用、ICF インターナショナル「DHS 測定」人口保健調査（直近の調査結果）
- 28 オフィス・オブ・ゴードン・アンド・サラ・ブラウン、2012年。
- 29 ウマル・バス、イッサおよびナタリー・ルーカス「サヘル地域の食糧危機における思春期の少女の保護 一般報告書」『Because I am a Girl 世界ガールズ白書』のための委託、プラン・インターナショナル、2013年1月。
- 30 プラン・インターナショナル「女の子の権利広報」プラン・インターナショナル、2012年10月11日。
<http://www.plan-eu.org/content/uploads/2012/10/Girls-Rights-Gazette-text-only-version.doc>（最終アクセス日 2013年5月15日）
- 31 難民女性委員会「思春期の女の子」難民女性委員会。
<http://www.womensrefugeecommission.org/programs/adolescent-girls>（最終アクセス日 2013年5月15日）
- 32 ロバート・バー「マララ・ユスフザイ銃撃事件 パキスタンのティーンエイジャーがタリバン襲撃から回復」『ハフィントン・ポスト』紙、2012年10月19日。http://www.huffingtonpost.com/2012/10/19/malala-yousufzai-shooting_n_1986127.html?utm_hp_ref=malala-yousafzai（最終アクセス日 2013年4月23日）
- 33 国連「教育が子どもの生活に安定性、正常性、日常性をもたらす（ラディカ・クマラスワミ）」国連、2009年3月18日。<http://www.youtube.com/watch?v=mmizBQTQBx8>
- 34 INEE「教育における、そして教育を通じてのジェンダー平等 INEEのジェンダーに関するポケットガイド」ジュネーヴ、INEE、2010年。

- 35 ジェニー・モーガン、アリス・ベアレント「静かなる苦しみ 戦争、HIV、その他の高リスク状況が西アフリカおよび中央アフリカにおける青少年に与える心理社会的影響」プラン・インターナショナル、2009年。
- 36 オルガンド・ポルテラ、マリア・ホセ、キリリー・ペルス「子どもの支援に依存する ショックを経験した子どもたちが抱えるリスクと保護因子」（2013年発行予定）に基づく。引用元はJ. ボイデン、M. ボーディロン（編）「貧困の下に成長する 子どもの人生からわかること」ベージングストーク、バルグレイヴ・マクミラン。
- 37 ナオミ・アルフィーニ、ベッキー・マーシャル、ラヴィ・カルカラ「津波対応プログラムにおける青少年の参加を促進する ワークショップ報告書」セーブ・ザ・チルドレン、2005年。
- 38 プラン・ドイツの災害リスク管理担当者ファビアン・ベックラーとの通信より。さらに参照——J. A. ヘール、P. R. ハンター、P. イェーガルス「家庭用水の運搬と健康に与える影響 南アフリカのリンボポ州における混合手法によるパイロット調査と報告」『アンヴィロン』誌第9号52巻（2010年8月26日）。
- <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/20796292>
- 39 思春期の女の子と緊急事態に関するオンライン調査「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」作成チームにより実施、2013年。
- 40 プロジェクトコーディネータのジーン・ケイシーへのインタビュー。「Because I am a Girl 世界ガールズ白書」プラン・インターナショナル・エルサルバドル、2012年。
- 41 ジーン・ケイシー、エルサルバドル、2012年。
- 42 ミシェル・バチエレによる「人道的支援指標 2011 ジェンダー問題に取り組む」DARA、
<http://daraint.org/humanitarian-response-index/humanitarian-response-index-2011/>（最終アクセス日2013年6月6日）についての発言。2013年3月、ミシェル・バチエレはUN ウィメン事務局長の職を辞し、チリ大統領の2期目を目指して立候補することを表明した。